

日本雁を保護する会では、『しあわせのシジュウカラガン物語』を近々発刊します。
この本は、人のために絶滅の淵に追いやられたシジュウカラガンへの強い思いを持つ人々が国際協力し、
40年近くの歳月をかけてその群れを復活させた、長い物語をまとめたものです。

編著・日本雁を保護する会(仮)

『しあわせのシジュウカラガン物語 — 絶滅から復活への道のり (仮)』

出版予定のお知らせ

発行：京都通信社

B6判、ソフトカバー、約300ページ

シジュウカラガン復活の歴史
『しあわせのシジュウカラガン物語』の挿絵より

シジュウカラガンの絶滅から復活への100年の道のり

日本雁を保護する会 会長 呉地正行

江戸時代には、「雁を十羽獲ると七、八羽」¹を占めるほど多かったシジュウカラガンは、20世紀初頭に繁殖地の島々に人間が毛皮目的で放したキツネのために、瞬間に絶滅の淵に追いやられてしまいました。「シジュウカラガンの群れを復活したい！」日本雁を保護する会は、国内外にその思いを伝え、同じ志を持つ日米口の人々との国際ネットワークを作り上げました。そして、40年近い年月をかけて、千島列島から日本へ渡る群れを復活させることに成功しました。

千島列島とアリューシャン列島は、キツネの放し飼いに適していたため、その標的になりました。不運なことに、これらの島はシジュウカラガンの繁殖地だったため、深刻な問題がおきました。

この本ではこれらの島に放されたキツネの状況と、そのキツネがどのようにシジュウカラガンを絶滅の淵へと追いやったのかについて触れています。

次にこれらのシジュウカラガンの復活について、その取り組みが先行していた米国の事例を紹介します。その後その支援を得て、ソビエト連邦(当時)も含め3国共同で開始した、アジアのシジュウカラガン復活計画について述べています。その途中でしばしば壁に突き当たりました。しかし、熱い思いが運も味方につけ、ついに5,000羽を超える群れの復活へと結びつきました。また生息地の保全方法についてもめどが立つようになりました。計画当初はほとんどの人が「シジュウカラガンの復活なんてできっこない、夢物語だ」と言っていました。日本雁を保護する会のような小さな自然保護団体でも、夢を諦めずに歩み続ければ、道は必ず開けるといことがこの本を読めば、皆さんにもご理解いただけると思います。現在、最後の編集作業をしています。出版の暁にはぜひ購入いただき、多くの方々にお勧めいただければありがたいです。

* 1 = 堀田正敦(ほったまさあつ)著『観文禽譜(かんぶんきんぷ)』(1831年)

ご予約・ご購入の問い合わせ：
京都通信社 <http://www.kyoto-info.com/kyoto/books/>

※(公財)日本鳥類保護連盟では、こちらの商品は扱っておりません。直接、京都通信社にお問い合わせいただけますよう、お願いいたします。